

104年ぶりに九十九里浜で再発見された上位蜃気楼

大木 淳一

奇妙な光景：上位蜃気楼と出会う！

あれは忘れもしない2015年8月6日の真夏、自宅から2キロほどの九十九里町・真亀海岸へ出かけた時のことだった。

海水浴客や観光地曳網で賑わう浜辺の遙か彼方、太平洋の水平線に目をやると、キラキラとダイヤモンドのようにきらめく奇妙な橋がかかっていた。南方の太東崎の先端は恐竜のように角を伸ばし、稜線が背ビレのように変化していた。さらに、北方の銚子方面へ目を向けると、建物や漁船が上方へ反転し、風力発電の風車の形が潰れて見えるという摩訶不思議な光景が広がっていた…。

この海辺に180度広がる異空間に気づいた時から、私は蜃気楼の魔法にかかってしまったようだ。

蜃気楼って何だろう？

ものの本によると、光が空気の温度の異なる層の間（あるいは温度が急に変わる層）を通過する時に屈折し、遠方の景色が変形して見える現象である。変形の向きで「上位蜃気楼」と「下位蜃気楼」に分けられる。

上位蜃気楼は、空気の温度が上側が暖かく下側が冷たい逆転層の状態の時に、景色が上に反転したり伸びて見られる。これは比較的珍しい現象で、富山湾では春などに発生するのを一目見ようと多くの人が集まる。激しい変化が起きた時は富山県魚津市では花火が打ち上がるほど、観光の目玉となっている。

下位蜃気楼は、下側が暖かく上側が冷たい空気の時に観察され、景色が下側へ反転して見える。冬の海上でしばしば起こり、アスファルト道路に夏などに見られる「逃げ水」も下位蜃気楼の一種だ。

2015年夏に私が目撃したのは「上位蜃気楼」だ(図1)。下位蜃気楼の一種の「だるま太陽」をここ2年間追いかけていた私にとって、まさに青天の霹靂だった。

寺田寅彦博士以来104年ぶりの発見か!?

目撃したものが九十九里浜でかつて見られたことがあるのか、疑問を抱いて過去の出現記録を探し始めたが、なかなか尻尾を掴めなかった。そこで、上位蜃気楼の認定でもお世話になった千葉県気象予報士・武田康男氏の協力を得て、日本蜃気楼協議会の専門家たちへ問い合わせることとなった。その結果、富山県伏木測候所「富山湾の蜃気楼」(1919)に、寺田寅彦博士が1911年に九十九里沖の船からスケッチした上位蜃気楼の模写が掲載されていることが判明した。その後、上位蜃気

楼が出現しなかったとは思えないが、記録としては一気に104年前にさかのぼることとなった。

寺田寅彦博士といえば、東京大学地震研究所の教授でもあり、文筆家としても著名な方であるが、同じ九十九里沖の上位蜃気楼に気づき、記録した人物として、急に親しい存在に感じた。

一躍メジャー入り!!

「もっと知りたい!」と思った私は、ほぼ毎日現地へ出かけ、2016年12月17日の冬に再び上位蜃気楼と出会うこととなる。全国的には春が出現シーズンなので、九十九里の蜃気楼は常識を打ち破る出方ようだ。

「もっともっと知りたい!」と思った私は、九十九里町の協力を得て、海水浴場の監視棟に定点カメラを設置し、24時間態勢で出現状況を確認する調査を開始した。その結果、2018年1月～8月までに上位蜃気楼を52日観測することとなった。

これは驚異的な数字で、出現日数としては北海道斜里町に次ぐ頻度、冬・春・夏の3シーズンに確実に観測できる地域としては、現在、斜里町と九十九里浜だけなので、専門家たちを驚かせる結果となった。

以上の顛末は2018年8月18日付の朝日新聞でも紹介され、九十九里浜の蜃気楼が日本を代表する場所として一躍メジャーになった。

九十九里浜でも魚津市のように蜃気楼が観光に貢献できるとなれば、地域博物館の研究結果が地域振興に役立つこととなり、地元から愛される博物館として確固たる地位を築くに違いない。九十九里浜にも多くの人が集い、花火を打ち上げて世界にアピールできる日を夢見て、日夜、九十九里浜で観測を続けている。



図1 九十九里浜南方・太東崎の上位蜃気楼 (2015年8月6日)

(生態学・環境研究所)